

博士学位論文審査要旨

2019年1月15日

論文題目： 戦後の日本基督教団の宣教の社会的関与に関する研究

学位申請者： 大倉 一郎

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 原 誠

副査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副査： 神学研究科 教授 関谷 直人

要 旨：

本研究は、戦後の日本基督教団（以下、教団）の宣教の活動に関して、その新たな実践と思想を展開した一群の宣教者の、とりわけ社会的関与とその神学的霊性を基礎において解明しようとしたものである。教団は日本におけるひとつの教会であるが、歴史的社会的に最大の教会であることから、この教会の宣教の展開は日本のプロテスタント教会の宣教における神学的位相を問うという意味からも意義ある研究の視点を提示したといえる。

日本のプロテスタント・キリスト教会における社会的関与に関しては、歴史的に例えば安部磯雄ら最初期の労働運動の開始や賀川豊彦、山室軍平などの歴史的系譜と遺産がある。その歴史的遺産が戦後の日本社会のなかで、どのように継承され展開されてきたかという問いの解明は、日本プロテスタント・キリスト教史の文脈のなかで重要な課題である。その意味と意義は、従来、一般的に日本の教会と神学の中で喧伝される「教会派」「社会派」という単純な2分法によってキリスト教の使命と課題を類別する考え方を問題視し、これらを越えて、キリスト教の宣教とは本来的にどのような方向性と射程を持つものなのかを問うところにある。本研究はこれらの諸前提を踏まえつつ、具体的には宣教の現場と教会形成に集中して、その宣教の社会的関与を実践してきた3人の牧師をその活動を跡づけて評価をしていくというものである。この3人とは、岩井健作、犬養光博、渡辺英俊という牧師である。現在、存命中の人々の神学と活動を神学的に評価することは、当然のことながら困難な事柄であるが、論者は、そのことを承知しつつ、本研究の課題である教団の宣教の社会的関与に関して、その意義を検討した。

第一章、第二章で、宣教という概念とその実践的展開がなされてきた南米の「解放の神学」の神学的意義と、その運動に決定的に影響を与えた「霊性」についてその意義を提示し、また戦後の教団の社会的実践に関わってきた10人の人物とその活動を整理した。

第三章から第六章では、これらの歴史的経緯を踏まえた上で、戦後の日本社会の急激な変化のなかでどのような宣教の活動がなされたか、3人の牧師のケース・スタディをおこなった。戦後の日本社会に生じた問題とは、産業社会化と資本主義化の進行に伴う問題であり、日米の軍事体制であった。その現実の中で直面した課題は、岩井の場合は、岩国教会の牧師であったベトナム戦争期の反戦運動であり、神戸教会の牧師であったときに向き合わざるをえなかった阪神・淡路大震災であった。犬養は、学生時代から「筑豊の子どもを守る会」に関わり、同志社大学大学院神学研究科を修了後、直ちに廃坑となった筑豊で福吉伝道所を設立して牧師として活動することになった。その中での地域の住民との出会いを通して「共生」の神学的意味と意義を、実践を通して問い続け、それが「福吉の苦学」として「明識の霊性」へと深められ、展開されていった神学的営為が明らかにされている。渡辺の場合は、「第三世界」の視座からフィリピンのキリス

ト教基礎共同体（BCC）に対する神学的課題を深め、その具体的実践を、横浜の寄場に設立した中伝道所での活動へと展開していった。新約聖書学者でもある渡辺はその聖書の理解を、具体的な現実の中で問い続け、キリスト教の宣教の社会的関与へといたる課題を提起し続けた。

この3人に共通していることは、社会的に存在する教会の現場で、その宣教を全体性の中に位置づけようとしたことであり、論者は、これらのケースを分析することを通して、キリスト教の宣教とは何であるかを析出しようとした。その意味と意義は「社会派」「福音派」という二分法を越える視点としての宣教の課題を問うものであり、今後の日本の社会におけるキリスト教宣教の展開において、重要な示唆を与えるものである。

よって、本研究は、博士（神学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2019年1月15日

論文題目： 戦後の日本基督教団の宣教の社会的関与に関する研究

学位申請者： 大倉 一郎

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 原 誠

副査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副査： 神学研究科 教授 関谷 直人

要 旨：

2019年1月8日、17時30分から19時30分の間、同志社大学神学館会議室において総合試験をおこなった。

申請者は、本研究の概要についてその経緯と成果を神学的に的確に説明し、質問者の間に対しても的確に応答し、その神学的理解が現代の神学的課題に対して十分に説得力を持つものであることを明らかにした。

また本研究に際して必要な英語力も、適切な水準であることが明らかとなった。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 戦後の日本基督教団の宣教の社会的関与に関する研究

氏名： 大倉 一郎

要旨：

本論文は、日本基督教団の宣教における社会的関与の歴史的展開を戦後期、就中、1960年代中葉以降の四十年間余りの時期について論究を試みる。戦後日本のキリスト教宣教は、社会的関与の領域でその取り組みを多様化し、深化してきたことは個々の宣教者の証言や述懐の事例を上げることができる。それらは歴史神学や宣教学の研究課題も生成することになる。先ずキリスト教宣教史の中にそれらをどのように記述し得るだろうか。またその記述が的を射たものでありえるだろうか。そのような問題意識の表明を序章に述べて論文に着手する。

本論文は、その問題意識にたちながら、それをキリスト教史としての記述に迎え入れて、具体的に記述にするための方法を模索し、第一章で一つの仮説的提案を試みる。その方法として、「宣教の社会的関与」、及び「宣教の霊性」という二つの概念モデルを立て、研究課題の解明を図る方法とする。これらの概念モデルは、その創案の背景として、第一に1960年代以降、グローバルな規模で検討されてきた「第三世界」の解放の神学に由来する宣教の概念を参照する。第二はラテンアメリカの解放の神学における宣教の社会的関与を伴う霊性論を手がかりとする。第三には筆者自身の三十年間余りの宣教の現場実践と、そこで関与した個別の社会活動のフィールドワーク的研究を援用する。

本論文は、上述のように序章に研究の動機、テーマ、及び目的を述べた。第一章に前述の宣教の社会的関与、宣教の霊性の概念モデルについて詳細に説明した。第二章では、宣教の社会的関与と、宣教の霊性、という両概念を手がかりにして、アジア・太平洋戦争後の日本基督教団の宣教史を、1960年代以降を重点的な論考の範囲として、宣教の社会的関与の概容を俯瞰する。具体的には、宣教の社会的関与者の概念で筆者がとらえている十名の宣教者について、その事績を素描する。

第三章～第六章までの各章では、第二章に取りあげる十名の宣教者の中から個別の宣教者を取りあげて、それぞれの宣教運動の実践と思想と霊性を考察して、それぞれの宣教論的意味を解明する。いわば、宣教の社会的関与の歴史における事例的研究といえる。それらの考察では三人の日本基督教団の牧師であった宣教者をとりあげる。これらの人物は、戦後、おおむね1960年代～2010年代に宣教者としての活動や発信をしてきた世代に属する人々である。終章として本研究の到達点を振り返り、さらに今後の課題を指摘する。

以上の論究を通じて、目ざすところは、宣教の社会的関与と名づける出来事が、紛れもなく戦後の日本基督教団の宣教史の重要な働きであったことの論証である。さらに単に戦後の教団の宣教史の特異な一部分というのではなく、それらの歴史は、教団教会史と有機的に結びついた福音そのものの宣教の出来事における現れであることを論証していく。

各章の展開をさらに述べると、序章では、先の論究に加えて、宣教の社会的関与は、キリスト教史、就中、教会史と有機的に結びついたイエス・キリストの福音そのものの宣教の出来事における現れと見る。この視座は、言い換えれば、教会共同体は福音宣教のために世界に遣わされ、福音宣教は、世界のみならず教会自身への招きとして、教会共同体を刷新し形成すると表現する

こともできる。ただし、ここで言う教会と宣教との関係は、教会と福音宣教の本質的相関関係を意味している。つまり、教会がイエス・キリストの弟子であることを根源的に目ざして生きれば、その教会の宣教が、教会自身のイエス・キリストに従う営みを問い返し、根源的なものにする。このことを、教会は宣教に遣わされ、宣教は教会をイエス・キリストの共同体にすると言うのである。

そのように考え得るならば、宣教とは、教会にとって外に向かうだけのベクトルではなく、自らの内にも向かうベクトルであるともいえる。宣教の社会的関与と本論文が呼んでいる宣教は、とりわけ、宣教のもつ教会内外の双方向へのベクトルとしての性格を現してくると考えられる。

第一章は、戦後の日本基督教団の宣教史に、新たな宣教の実践と思想を展開した一群の宣教者たちが1960年代後半に登場したと指摘し、それらの宣教を理解するのに宣教の社会的関与という概念モデルを立て、その核心を人間化の宣教と論じる。さらに、宣教の社会的関与者の理解を実態に迫って掘り下げるのに宣教の霊性という概念モデルを用い、それは社会活動を伴う批判的なキリスト教霊性であると指摘する。

第二章において、それらの宣教の社会的関与に関して教団を中心とした1960年代からの宣教の社会的関与の担い手たちを一つの群像として記述することによって鳥瞰する。そのことを通じて、それらの宣教者たちに共通する基本的性格を示す。それは、日本社会の諸問題の現場の宣教で、社会分断の下で限界状況や危機的事態にある人々と共に、尊厳ある人間の生を取り戻すために、それらの人々と共に社会問題に取り組み、あるいは社会運動を伴って活動した営為である。それらの営為において宣教者たちはイエス・キリストの霊性を自らの生の根源的方向として受け入れている。その宣教者たちの模索の中でイエス・キリストの福音は出来事と共に現在化する。宣教の社会的関与の担い手たちは、そのような発見と証言をそれぞれの個性を通じて示している。

第三章～第六章においては、宣教の社会的関与の担い手、岩井健作、犬養光博、渡辺英俊という個々人に焦点を合わせて、それぞれの宣教における社会関与の実践と思想と霊性とを、それぞれの特色をたどって記述する。これら三人の教団の牧師たちの宣教の軌跡をたどることによって、1960年代からの教団での宣教の社会的関与は、グローバルなキリスト教宣教史の中に次のような意味で位置づけをもっていることが分かる。それは第二次世界大戦後の世界教会運動の宣教学の潮流に対する日本のプロテスタント宣教者たちの応答の歴史だったということである。第二次世界大戦後の宣教学的転換というべきミッシェル・デイの宣教論は、人間化の宣教論として1960年代には日本のプロテスタント宣教者たちも知っていた。さらにミッシェル・デイの宣教論を「第三世界」状況で深化した解放の神学の宣教論もまた、教団の宣教の社会的関与の担い手たちは受けとめて応答していたのである。

しかし、他方で、1960年代からの教団の宣教の社会的関与は、日本のプロテスタント・キリスト教史の文脈においてこそ重要な位置づけをもっている。この研究が取り上げた宣教の社会的関与の担い手たちは、それぞれの宣教の現場で、1960年代日本社会に噴出していた分断状況の抑圧を被っていた民衆と出会った。そこで、人間を踏みじめる資本と権力への憤り、侮辱され痛みを負った民衆への共感が、宣教者たちに自他の人間の尊厳と宣教者のミニストリーの再発見を、福音のメッセージに照らして迫ったということである。

宣教の社会的関与の担い手たちは、おおむねその宣教の当初から教会中心の改宗的伝道主義に対する疑問や批判から出発していた。そしてそれぞれの宣教の実践を重ねるなかで、従来の宣教と教会への批判の側面だけでなく、それらの再形成の課題に直面して行ったのである。一方で、批判の側面を強く示している宣教者もあった。それらを思想の限界と見るのか。他方、批判しつつ再形成の課題を意識した宣教者もあった。それらには思想の可能性を認めるか。こ

これらのことは単純に、また一律に判断できない。判断の変数は幾つかあって、その宣教者が関わっていった社会問題や担っていた社会運動の性格や動向、教団・教会・会衆との関係性、何よりも福音理解のあり方、などがそれである。その多元的な判断が必要であることを前提としたうえで、それぞれの宣教者が1960年代からの時代状況の中で、分断との対峙と克服の運動において個性をもつ宣教の歴史を歩んだのだと考えられる。

しかし、同時にいずれの宣教者も、教会というキリスト教共同体と宣教の社会的関与との関係の課題をめぐってさまざまに模索した。その課題を担う主体としての個人と共同体としての教会の関係の問題と言ってもいい。教会の共同性とは、人間同士の分断を越える連帯を祈りと行動において放棄するならば、教会としては真実とは言えないであろう。たとえ困難な課題であっても、分断の克服はすでに教会そのものにおいて根本的課題である。

終章では、前章までの論究によって我々は一つの歴史的反省を自覚しえることを指摘する。つまり、先に第二章で考察したように、堀光男は、教団の1960年代の動向を総括して、教団での社会活動の歩みが、政治・社会問題に対する教団のアレルギー体質を改善したと指摘していた。その評価に続けて、1960年代の終わりごろから「福音派」と「社会派」という無意味なレッテル貼りや相互非難もなされるようになったとの反省点も述べた。堀のその指摘は、今日まで悩ましい教団の状況として連続していると考えられる。

教会の宣教を「福音派」、そうでなければ「社会派」という二分法のもとに判断する発想は、あまりに表層的で狭隘だと言わねばならない。それは、用いた時からレッテル貼りの迷路に陥ることになる二分法だということが、宣教の歴史一観念ではなく一に照らして反省されなければならない。宣教における福音の多様で豊かな証言は、宣教の社会的関与の生きた経験から聴くことができる。それらの声に耳目を閉ざすならば、その結果は宣教史と教会史において甚だしい誤解を招いて終わるであろう。ここにもさらなる宣教の社会的関与の研究における個別研究の必要が認められることを指摘する。最後にこの論究によって、戦後の教団の宣教の社会的関与の理解には、近代植民地主義の支配を経験したアジア諸民族のキリスト教宣教史に関連した理解の形成が今後の研究課題であることを指摘する。